

「派遣先が消える日」は来るのか

製造業4万社超に迫る倒産ドミノ——人材ビジネス業界への波及を徹底検証

◆ ナフサとは何か——「燃料」ではなく「産業の母」

ナフサとは、原油を精製する過程で得られる石油化学製品の基礎原料だ。プラスチック・合成ゴ

「ナフサ (Naphtha)」という言葉を知っている、すぐにピンとくる人は少ないだろう。だが、今の瞬間も、日本経済の根幹を揺るがす「産業の血液」が止まりかけている。

◆ 発端——ホルムズ海峡の封鎖

2026年2月28日、米国・イスラエルによるイランへの軍事攻撃をきっかけに、世界の石油輸送の約2割が通過するホルムズ海峡が事実上の機能不全状態に陥った。

日本のナフサ輸入の約8割は中東産（国産ナフサの原料となる原油まで含めれば実質9割超が中東依存）であり、この「輸送の要衝」が閉ざされたことで、サプライチェーンは一瞬にして崩壊した。

第1章 「ナフサショック」とは何か——産業の血液が止まる



◆ ナフサとは何か——「燃料」ではなく「産業の母」

ナフサとは、原油を精製する過程で得られる石油化学製品の基礎原料だ。プラスチック・合成ゴ

「ナフサ (Naphtha)」という言葉を知っている、すぐにピンとくる人は少ないだろう。だが、今の瞬間も、日本経済の根幹を揺るがす「産業の血液」が止まりかけている。

◆ 発端——ホルムズ海峡の封鎖

2026年2月28日、米国・イスラエルによるイランへの軍事攻撃をきっかけに、世界の石油輸送の約2割が通過するホルムズ海峡が事実上の機能不全状態に陥った。

日本のナフサ輸入の約8割は中東産（国産ナフサの原料となる原油まで含めれば実質9割超が中東依存）であり、この「輸送の要衝」が閉ざされたことで、サプライチェーンは一瞬にして崩壊した。

ム・合成繊維・塗料・医薬品——現代生活のあらゆる製品の「出発点」がナフサである。

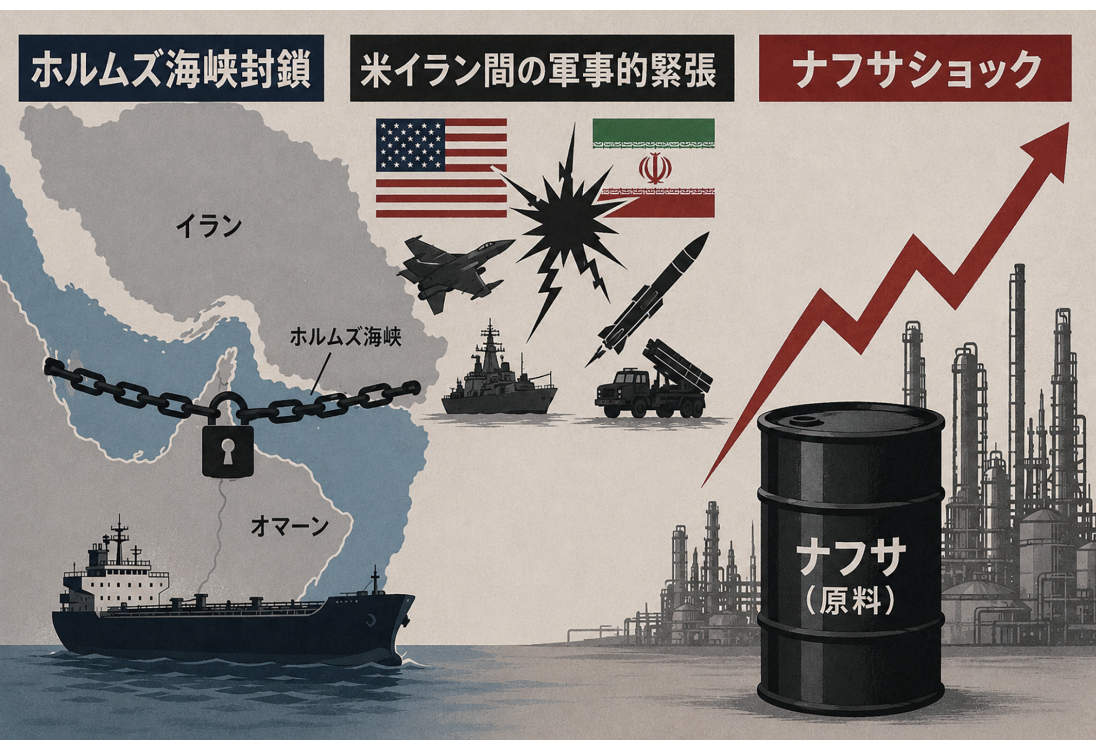
しかも、原油には230日分の国家備蓄制度があるが、化学原料としてのナフサには国家備蓄の仕組みがない。民間在庫はわずか約13〜14日分。「原油はたっぷりあるのに、産業の材料は2週間を底をつく」——これが2026年のナフサ・クライシスの正体だ。

ナフサの供給不安は、単なる化学メーカーの問題にとどまらない。エチレンやプロピレンといった基礎化学製品の生産が滞れば、その影響は数週間うちに川下産業へと伝播する。食品包装・医療用チューブ・自動車部品・建材——日常生活を支えるあらゆる製品がナフサ由来の素材なしには成立しない。

今回のホルムズ海峡封鎖が突きつけたのは、日本の産業構造が持つ「一点集中型の脆弱性」そのものだ。代替調達先の確保には時間がかかり、コストは跳ね上がる。この構造的な問題こそ、2026年クライシスの本質である。

ナフサ供給の連鎖構造

原油 → 精製 → ナフサ → ナフサクラッカー → エチレン / プロピレン / 合成ゴム → 樹脂・ゴム部品 → 自動車・家電・建材・包装材・医療機器



緊急特集
ナフサ・クライシス2026

「派遣先が消える日」は来るのか

製造業4万社超に迫る倒産ドミノ——人材ビジネス業界への波及を徹底検証

2026年春、日本の産業界を静かに、しかし確実に蝕む「ナフサ・クライシス」が勃発した。発端は2月末の中東情勢緊迫化によるホルムズ海峡の事実上の封鎖。日本のナフサ調達の約8割を担う輸送ルートが遮断され、プラスチック・合成ゴム・塗料・包装材など、現代産業の根幹を支える「産業の血液」が止まりはじめた。

帝国データバンクの調査では、国内製造業の約3割にあたる4万6,741社が調達リスクに直面する可能性があるという警告。豊田合成の副社長が決算会見で「6月のどこかで懸念が出る」と公言し、旭化成社長は「価格転嫁はマスト。事業が成り立たなくなる」と明言した。経団連会長でさえ国民への節約要請も排除すべきでないとの見解を示している。

人材ビジネス業界に、まだ直接の「派遣切り」は起きていない。しかし6月を境に、その静けさが崩れるかもしれない。本特集では、ナフサ・クライシスが人材ビジネスに及ぼす波及シナリオを徹底検証し、今この瞬間に打つべき一手を問う。